

多言語・多文化クラスの意義と課題

池田 智子

キーワード：多言語、多文化、日本語、交流、留学生、相互学習

概要

多文化共生が社会全体の課題となっている現在、多くの大学で留学生と日本人学生の相互学習を目的とした授業が行われている。本学で2008年度から筆者が担当している「多言語交流演習」もこの流れに位置づけられるが、日本語母語話者、非母語話者の履修者を同数としている点、非母語話者の日本語力が初級前半から上級まで幅広い点などがユニークである。

授業では①異なる視点に触れることによって普段何気なく使っていることばやコミュニケーションの方法を意識化する、②異なる背景の人間とのやりとりを通して文化の違い・共通点などを考察し、視野を広げる、③異文化間コミュニケーション能力とは何かについて考え、さらにそういった能力を身につける、④新しい言語を学ぶ楽しみ、コミュニケーションの難しさと楽しさを知ることなどを目標としている。毎回その週のテーマに関連した様々なグループ活動と教師による短い講義を組み合わせしており、数回にわたって行う言語の交換授業も重要な活動である。

本稿では、まず授業の実践報告を行い、次に、最低限の共通言語しか存在しない状況におけるものを含む様々な活動を通して学生がどのような経験をし、何を学んでいるのか分析し、さらに今後の課題についても論じる。アンケート調査では、新しい知識が得られただけではなく視野が広がった、固定観念や偏見がなくなった、日本人／留学生と交流することが怖くなくなったなどの意識の変化があったと考える学生が目立ち、また、コミュニケーションの多面性、言語の奥深さや非言語の重要性について認識し、学んだことを教室外でも応用したという声も多く聞かれた。

このような教育実践は、本学の長期ビジョンおよび中期目標で重要な位置を占める「キャンパスの国際化」に貢献するだけでなく、多文化共生社会の実現に向けての重要な一歩となるであろう。

1. はじめに

近年、グローバルな人の移動の活発化により、多文化共生が社会全体の課題となっている。多文化共生社会の実現は、人道主義の目指すところであるだけでなく、時代の必然・要請であるとも言える。このような社会状況の中、現在、日本の多くの大学で留学生と日本人学生の相互学習を目的とした授業が行われている。これらの共通点としては、日本人と留学生の両者が対等である、継続して行われる、体験学習である、双方に単位が出る(足立・押谷・土屋 2001)、留学生と日本人学生の相互作用・学習の双方向性を重視し、異文化理解の促進を目指す(岩井 2006)ことなどが挙げられる。桜美林大学において2008年度から筆者が担当している「多言語交流演習」¹も、この流れに位置づけられるものだが、日本語母語話者、非母語話者の履修者を同数としている点、非母語話者の日本語力が初級前半から上級までと幅広く、最低限の共通言語しか存在しない状況で行われる活動が多い点などがユニークである。

本稿では、この実践を報告し、授業を通して学生がどのような経験をし、何を学んでいるのかを考察する。また、こうした多言語・多文化クラスが桜美林学園の長期ビジョンおよび中期目標で重要な位置を占める「キャンパスの国際化」、現在の大学教育一般、ひいては多文化共生社会の実現において果たし得る役割と今後の課題についても論じる。

2. 実践の概要

「多言語交流演習」は本学のリベラルアーツ学群日本語教育専攻プログラムが提供する科目の一つで、学部レベルの「日本語教育専攻の入り口科目」という位置づけだが、他の専攻の学生も履修可能である。毎年春学期に週1回(90分)2単位で開講されている。

以下はシラバスから抜粋した「授業概要」である。(なお、シラバスは全文、日英の二カ国語で書かれており、日本語部分の漢字には適宜振り仮名を付している。)

さまざまな言語・文化を背景とする学生(日本語の母語話者、非母語話者)から成るクラス、つまり言語・背景知識・常識が必ずしも共有されない場において言語・言語以外の要素の果たす役割を学ぶ。また、言語の交換教授その他の活動を通して実際の異文化間コミュニケーションを体験する。それらの活動を通して視野を広げ、多文化共生社会で必要とされる能力を身につけることを目指す。

2-1 この科目の目的

学生は、シラバスに「目標」として掲げられている以下のことを目指して学ぶ。(1)異なる視点に触れることによって、普段なにげなく使っていることばやコミュニケーションの方法を意識化する。(2)異なる背景の人たちとのやりとりを通して文化差・共通点を考察し、視野を広げる。(3)異文化間コミュニケーション能力とは何かについて考えを述べることができるようになり、さらにそういった能力を身につける。(4)新しい言語・言葉を学ぶ楽しみ、コミュニケーションの難しさと楽しさを知る。

また、授業に臨む姿勢として、(1)異文化コミュニケーションについて学ぶと同時に実践する場でもあるので、「恥ずかしい」、「照れくさい」といった気持ちは捨て、言葉や体全体を使って参加してほしい、(2)自分の言っていることが相手に伝わっているかどうか常に気をつけてコミュニケーションをとること、という二点も強調している。

さらに、特に日本人学生に、「留学生や外国人との交流イコール英語によるコミュニケーション」ではないという気づきを促すことも狙いの一つである。一般に、外国人との交流には英語が不可欠であると考えられることが多く、本学基盤教育院の日本語プログラムが運営する「日本語クラスゲスト制度」²への登録時のコメント、本科目における毎週の振り返りを見ても、一部の学生の間では根強いように思われる。必要とあらば英語が使えることは重要だが、英語以外の言語も使えることの意義を認識し、非母語話者が理解しやすい日本語で話し、書くスキルを身につけてもらいたいと考えて授業を行っている。

2-2 対象

履修年度の指定は1年次以上で、日本語教育以外の専攻の学生の履修希望も多い。クラスの人数は28名(2012～2013年度)～32名(2008～2011年度)で、母語話者・非母語話者³を同数にするため事前申し込みによる抽選を行っている。留学生の出身国・地域および母語が偏らないよう留意しているが、応募者に占める割合の関係で、毎回、中国(香港、マカオを含む)、韓国、米国数名ずつ、その他が各1～2名という構成となっている。これまでに、上記以外にアイスランド、イギリス、エジプト、オーストラリア、カナダ、スイス、タイ、台湾、ベトナム、マレーシアの学生が履修している。留学生に対しては、春学期のオリエンテーションで日本語科目の説明を行う際に、関連科目として、この科目も紹介する。参加を希望する留学生は短期交換留学プログラムの学生が圧倒的に多く、したがって受講者も海外の提携校からの交換留学生が大半を占めている。本学での学位取得を目指して学ぶ学群留学生は毎回2名前後となっているが、ここ二、三年ほどは学群留学生の応募も増加傾向にある。留学生の日本語力に関する条件は一切設けていないため、日本語のレベルは初級前半から上級までと幅広い。

2-3 授業の内容・進め方

ほぼ毎回、その週のテーマに関連したグループ活動(ミニ発表、ゲーム、ディスカッション等)と教師による短い講義を組み合わせている。トランプを用いた異文化シミュレーションゲームである「バーンガ」⁴以外のグループ活動は4人で行うが、文化背景、専攻、言語能力などを考慮し、日本語母語・非母語の学生が2人ずつとなるよう、活動ごとに教師が組み合わせを決定している。表1に、2013年度の内容を示す。

表1 「多言語交流演習」2013年度春学期 授業内容

| 週 | 内容 |
|----|--|
| 1 | 科目説明、自己紹介(クラス全員と一対一で行う「総当たり」方式) |
| 2 | 「文化」とは? : グループ内発表(「私の文化」紹介) |
| 3 | 非言語コミュニケーション1 : グループでの実験会話 |
| 4 | 未知の言語を学ぶ : 直接法によるゼロ初級インドネシア語ミニレッスンの体験 |
| 5 | 交換教授1、非言語コミュニケーション2 |
| 6 | 交換教授2、コミュニケーション・ストラテジー |
| 7 | コミュニケーションとルール : 異文化シミュレーションゲーム「バーンガ」 |
| 8 | 異文化間コミュニケーションにおける誤解 : 異文化マンガを用いたディスカッション |
| 9 | 異文化間コミュニケーション能力とは? : グループで定義を考えるタスク、発表 |
| 10 | 交換教授3、異文化間コミュニケーション能力・摩擦 : ビデオ視聴、考察 |
| 11 | 交換教授4、異文化摩擦のカルチャー・アシミレーター |
| 12 | 同一言語内のバリエーション、言語と(権)力 |
| 13 | 発表(言語レッスン、または1学期間の振り返りを自分の母語以外の言語で発表) |
| 14 | 発表(同上) |
| 15 | 発表(同上)、まとめ |

留学生の日本語のレベルが様々であるため、教師の使用言語は、日本語が初級で英語が理解できる学生がいる場合は日英語の併用を原則とし、内容や学生の日本語力の伸長に応じ、語彙や文法、日英語の比率などを適宜調節している。配布物も、通常初級のごく初期段階で学ぶ漢字以外にはルビをふり、英訳をつけている。ほぼ毎回、授業の振り返りをOBIRIN e-Learning (Moodle) で提出することを課すが、それ以外の課題としては観察レポート、発表や交換教授の準備、その他の小課題および最終発表、最終レポートがある。

15週の各回で扱う内容、活動は表1の通りだが、補足が必要であると思われるものに関し、以下に活動の狙いや手続きを記す。

【第1週】クラス全体への自己紹介ではなく、教室内を動き回り、自分以外の全員と話す。1学期間、共に学ぶクラスメートのことを知るのが第一の目的ではあるが、授業の振り返りシートでは、自己紹介のコミュニケーション面での気づきを促す質問も設けている。

【第2週】初めに「文化」を定義することはあえてせず、4人のグループ内で一人ずつ、「自分の文化」を10分で紹介する。学生は各々「文化」とは何か考え、準備をして来る。伝統文化、現代大衆文化、若者文化、出身地の食文化や行事など、他の学生たちの選んだテーマの幅広さに驚く者も多い。毎回、物質文化、精神文化に関わる発表が多く、行動(様式)面に関するものはほとんどない。発表後、一般的な「文化」の定義を紹介する。

【第3週】グループに分かれ、各人が特定の非言語行動に制約を加えたロールカードを引く。互いの条件は知らないまま指示に従って会話をし、視線・頷きその他の重要性を身をもって体験した後、普段無意識に用いている非言語の果たす役割について話し合う。

【第4週】目標言語を媒介語を使わずに教える直接法によるインドネシア語レッスン体験は、翌週から始まる言語の交換教授を意識したものである。ほとんどの留学生は日本語で日本語を学ぶという形で直接法を経験しているが、多くの日本人学生にとっては初めての経験である。絵カードや身振り手振り、繰り返しを多用したミニレッスンを外部講師に依頼している。翌週からの活動の参考になることを期待した活動だが、教育実習を控えた日本語教育専攻の学生からの「学習者の気持ちが変わった」という声も毎回聞かれる。

【第5、6、10、11週】日本語母語、非母語二名ずつから成るグループで数回行う交換教授は、この科目の柱として重要なものとなっている。教える言語は自分の母語でも外国語でもよく、ある言語の地域または社会方言でもよい。目的は自分が使える言語を新たな視点で見ることができるようになる、相手に伝えるための工夫をするという体験をすることなどである。1～2週前にグループ分けを発表し、メンバー同士が互いの外国語能力や、どのようなレッスンに関心があるかを知るための短いセッションを設けている。外国語教育専攻の学生ばかりではないため、15分をどのように組み立てるか、教案のサンプルで例を示しておく。一週に二人が教師役となり、それぞれ15分のレッスンをする。文字カード、絵カード、写真など視覚教材を使用し、一方的な講義ではなくやりとりを心がけるよう奨励している。毎年、課題の準備段階で最も多くの相談を受けるのがこの活動である。

【第7週】「バーナガ」は学生たちがストレスを感じつつも気づき、学ぶことの多い活動である。この活動の振り返りシートには、他の回よりも多くのことを書く学生が多い。

【第8、11週】異文化間の誤解や摩擦に関わるエピソード(マンガ、文章)をグループで読み、何が「問題」となっているのか、その背景にあるものは何かを話し合う。まず、全員がストーリーを理解しているかどうかの確認から始める。日本語で書かれたエピソードでは、言語面の理解においては日本人学生が優位に立つことがほとんどだが、相手に通じる

言語・表現で説明をするのに苦労することが多い。英語のエピソードでは英語圏の留学生と立場が逆転する。この活動は言語への依存度が高いため、それまでに非言語の重要性を強く感じるようになっていた学生たちも、ここで言語の重要性を再認識することになる。

【第9週】事前に個人で「異文化間コミュニケーション能力」とはどのような構成要素から成るものか考え、授業ではグループで一つの定義を作り上げ、クラス全体に発表するというタスクをする。内容面だけではなく、数人で合意に達するプロセス自体が、まさにこのような能力を必要とするものであるということに学生が気づくことも期待している。

【第10週】国際結婚について在日外国人同士が激論を戦わせるテレビ番組⁵の一部を視聴し、異文化摩擦に関わる内容と異文化コミュニケーションの方法について考える。字幕の使い方や演出を通し、テレビ番組が外国人をどのように描いているか気づくというメディア・リテラシーにもつなげたいと考えている。

【第12週】この回はほとんど講義形式で進める。方言、消滅の危機に瀕している言語、国連の公用語に見る言語と政治、英語帝国主義、日本語学習者数の変遷、言語的少数者など、社会言語学のトピックのいくつかを取り上げる。これらは多文化共生社会において不可欠な視点であるとの考えによるものである。

【第13、14、15週】最終発表は、交換教授で行った言語のミニレッスンとは異なることを教えるか、母語以外で授業を振り返る発表をするかを選択して行う。前者の場合、必要となる「学生役」には自分で依頼をする。例年、前者を選ぶ学生のほうが多い。

3. 学生の学び

以上、「多言語交流演習」の実践を紹介した。例年、初めから非常に積極的に取り組み、グループ活動が停滞した時など何とか打開すべくリーダー的役割を担おうとする学生もいる一方、参加型の授業を選んだとは言え消極的な学生もいる。後者に属する学生も、学期が進むにつれて参加態度に多少なりとも変化が見られることが多いが、稀に表面上はあまり変化が感じられない場合もある。また、参加者同士が意志の疎通に困難を極めることも珍しくないが、回を重ねるごとに工夫をしている者も多い。毎回の課題では、言語、非言語、異文化理解などについて様々な振り返りが見られる。

では、この授業への参加を通し、学生は何を感じ、学んでいるのだろうか。同じ授業でも得るものが人によって異なるのは当然だが、日本人学生と留学生とでは、この科目への期待や授業で経験することへの反応において、個人差を超えた違いがあるのではないかと考えられた。留学生は既に異国に身を置き毎日外国語(日本語)を使用しているのに対し、

日本人学生には海外経験がない者もあり、また、短期留学などの経験はあっても、現在、日常的に異文化接触の機会があるわけではない者が大半を占めるからである。

以下では、全学で実施する共通の授業評価アンケートとは別にこの科目で独自に行っている学期末アンケートの結果を報告し、そこから見えてくることを考察する。

3-1 調査方法

2010年度から毎年、この科目の個々の活動に対する学生の評価を知ることを主眼としたアンケートを授業の最終日に実施している。無記名だが、回答者が留学生かどうかを聞く項目は設けている。日英語のバイリンガルで、授業で行う各活動の有用性に関する選択式の設問と、自由記述の設問から成る(資料参照)。質問紙は全学共通の授業評価アンケートと同時に配布し、授業担当者の退室後に記入、代表の学生が日本語講師室のアンケート回収箱に入れるという方法をとっている。2013年度までに4回実施し、総回答者数は日本語母語話者54名、非母語話者50名、不明が4名であった。

3-2 アンケート調査の結果

まず、授業で行った主な活動に対する総合評価および「印象に残った」、「役に立った」、「なくてもよかった」活動を各3点まで挙げてもらった結果を報告する。

3-2-1 各活動への総合的な評価

授業で行った主な活動のそれぞれについて「5(とてもよかった)」～「1(全然よくなかった)」の5段階評定から一つ選ぶ形式とした。「5」を5点、「1」を1点とし、各活動の4年分の平均点を算出した結果が以下の表2である。回答を日本語の母語話者、非母語話者に

表2 活動への総合的な評価

| 順位 | 母語話者 | 点 | 順位 | 非母語話者 | 点 |
|----|--------------------|------|----|----------|------|
| 1 | バーンガ(7週目) | 4.53 | 1 | 非言語実験会話 | 4.48 |
| 2 | 直接法体験(4週目) | 4.48 | 2 | 文化紹介 | 4.43 |
| 3 | 言語交換教授(5、6、10、11週) | 4.4 | 3 | 直接法体験 | 4.38 |
| 4 | 文化紹介(2週目) | 4.25 | 4 | バーンガ | 4.35 |
| 5 | 非言語実験会話(3週目) | 4.23 | 5 | 言語交換教授 | 4.3 |
| 6 | 異文化エピソード(8、11週目) | 4.05 | | 異文化間能力 | 4.3 |
| | 言語と(権)力(12週目) | 4.05 | 7 | 異文化エピソード | 4.15 |
| 8 | 異文化間能力(9週目) | 4.03 | 8 | 言語と(権)力 | 4.05 |
| 9 | 異文化摩擦ビデオ(10週目) | 3.8 | 9 | 異文化摩擦ビデオ | 4.03 |

分け、評価の高い順に並べてある。左側の列の活動名の後に、表1中の何週目の活動に当たるかを示した。なお、アンケート実施初年度の2010年には行ったが翌年以降は実施していない活動は除いた。2010年度には評価対象の活動として質問紙に提示しなかった言語交換教授に関しては、2011～2013年の3年分の平均とした。

3-2-2 印象に残った／インパクトが強かった活動

次に、印象に残っている、インパクトが強かった活動を強い順に3位まで挙げてもらった。1位を3点、2位を2点、3位を1点として集計し、順位を出したのが表3である。便宜上、表では日本語母語話者を「日」、非母語話者を「留」とした。

表3 印象に残った活動(上位3位まで)

| 年度 | | 1位 | 2位 | 3位 |
|------|---|-------|-------|------------|
| 2010 | 日 | バーンガ | 直接法体験 | 非言語実験会話 |
| | 留 | バーンガ | 直接法体験 | 異文化摩擦ビデオ |
| 2011 | 日 | 直接法体験 | 交換教授 | バーンガ |
| | 留 | バーンガ | 直接法体験 | 交換教授 |
| 2012 | 日 | バーンガ | 交換教授 | 直接法体験 |
| | 留 | バーンガ | 交換教授 | 非言語実験会話 |
| 2013 | 日 | 直接法体験 | バーンガ | 非言語実験／交換教授 |
| | 留 | バーンガ | 直接法体験 | 交換教授 |

※ 2010年度のアンケートでは、「言語の交換教授」は活動として挙げられていなかった。

3-2-3 役に立った活動

以下の順位の出し方は3-2-2と同様である。この項目は2011年度に加えた。

表4 役に立った活動(上位3位まで)

| 年度 | | 1位 | 2位 | 3位 |
|------|---|-------------------|-------|----------|
| 2011 | 日 | 交換教授 | 直接法体験 | 異文化エピソード |
| | 留 | 非言語実験／直接法体験 | 交換教授 | 文化紹介 |
| 2012 | 日 | 直接法体験／バーンガ／異文化間能力 | 交換教授 | 異文化エピソード |
| | 留 | 非言語会話実験 | バーンガ | 交換教授 |
| 2013 | 日 | バーンガ | 交換教授 | 非言語会話実験 |
| | 留 | 直接法体験 | 交換教授 | バーンガ |

3-2-4 しなくてもよかった／役に立たなかった活動

集計法は上述の通りである。空欄は、何も記入がなかったことを示す。

表5 しなくてもよかった活動 (3位まで)

| 年度 | | 1位 | 2位 | 3位 |
|------|---|----------|--------------|-----------------------|
| 2010 | 日 | 言語と(権)力 | 異文化摩擦ビデオ | 連想ゲーム／異文化エピソード／異文化間能力 |
| | 留 | 言語と(権)力 | 連想ゲーム | 異文化摩擦ビデオ／異文化エピソード |
| 2011 | 日 | 異文化摩擦ビデオ | — | — |
| | 留 | 異文化エピソード | 異文化間能力 | 異文化摩擦ビデオ |
| 2012 | 日 | 異文化摩擦ビデオ | 文化紹介 | 異文化エピソード／言語と(権)力 |
| | 留 | 異文化摩擦ビデオ | 言語と(権)力 | 異文化エピソード |
| 2013 | 日 | 異文化摩擦ビデオ | 異文化間能力 | 文化紹介／非言語実験 |
| | 留 | 異文化摩擦ビデオ | 直接法体験／異文化間能力 | — |

3-2-5 自由記述式の回答より

各活動の数値による評価の後に、自由記述で回答する項目を4つ設けたが、それらの質問への導入の意味を込め、まず、以下の問いを設定した。

【学期の初めと今を比べ、自分の何かが変わりましたか。】

選択肢は「はい」と「いいえ」のみだが、無記入のものもあった。結果は以下の通りである。

表6 自分の何かが変わったか

| | 母語話者(54名中) | 非母語話者(50名中) |
|---------|------------|-------------|
| はい | 49 | 37 |
| いいえ | 1 | 2 |
| 不明(無回答) | 4 | 11 |

無回答は「どちらとも言えない」という意味か、単なる記入漏れなのか不明だが、留学生の無回答が11名中6名と多かった2010年度の質問紙を見ると、レイアウト上の問題により、この設問がわかりにくかった可能性もないとは言えない。仮にこの年の回答を除外してみると、母語話者は40名中「はい」が36名、「いいえ」が1名、無回答が3名となり、

非母語話者は39名中「はい」が32名、「いいえ」が2名、無回答が5名となる。

「はい」と答えた者に対する「何が変わったか」、「この授業で何を学んだ／気づいたか」、「この授業のどこを変えたらもっとよくなると思うか」という設問、「そのほか何でも」という項目への回答を内容ごとにまとめ、代表的なものを以下で紹介する。文末の(日)は日本人学生を、(留)は留学生を表す。(英語で書かれている場合は留学生によるもの。翻訳は筆者。)

【「はい」と答えた人は、どんなことが変わりましたか。】

■考え方、姿勢に関わるもの

- 異文化を持つ人と関わる時、違って当たり前という考えを持つようになった(日)
- 色々な国に対する偏見がなくなった(日)／日本人以外の人に対する考えが変わった(日)／ステレオタイプな考え方がなくなった(日)／一人一人に目を向けようと思うようになった(日)
- 留学生と接するときに「留学生だから」というような考えがなくなった。構えなくなった(日)
- 自分が当たり前だと思っていることが世界では実はそうでもなかったりすることがわかった(日)
- 色々な人との交流を通して新しい視点を発見できた(日)／I learnt so much about intercultural communication from a different perspective [新しい視点から異文化間コミュニケーションについて多くのことを学ぶことができた]
- 異文化について自分がほとんど無知だったことに気づき、もっと知りたいと思うようになった(日)／異文化に興味が出て、もっと勉強したくなった(留)
- 「異文化」に対する親しみを持てるようになった(日)／未知の言葉や人や文化が怖くなくなった(日)
- 文化の概念が変わった(日)／my understanding about different cultures [色々な文化についての理解]
- 自分の話している言語について十分に考えられるようになった(日)

【この授業で何を学びましたか、どんなことに気づきましたか。】

■気づき

- 非言語の重要性(日)／言葉だけの問題ではない(日)／nonverbal rules and social behaviors that are different in each culture [文化によって異なる非言語ルールや社会的な行動]

- たくさんの考え方があること(日) / 自分が固定観念を持っていることに気づいた(日) / 同一文化だからと言ってひとくくりにできない(日)
- 私は異文化交流する際に相手のことは考えていたが、自分の文化を理解した上でコミュニケーションしていなかった(日)
- 「日本人と外国人」ではなくて、みんな同じ人間だ(日)
- 日本語の奥深さ(日) / 分かりやすく簡単に話すことの難しさ(日) / difficulties of intercultural communication [異文化間コミュニケーションの難しさ]
- 無意識に自文化を中心に考えていたこと、マイノリティーが生きにくい世の中になっていること(日)
- There is always more to learn about different cultures [違う文化について学ぶべきことは尽きない]
- 様々な国の人と接する楽しさを知った(日) / 異文化交流は思ったより面白い(留)
- コミュニケーションは理論だけではなく実際にやるのが大事(留)
- a lot about myself / I was made more aware of myself and my characters in relation to others [自分自身について多くのこと / 他者との関係における自分や自分の性格への気づき]

■知識

- 留学生の話を聞いて、国による違いを知った(日)
- 色々な日本の習慣を習った(留) / 外国の文化や習慣について知識が増えた(留)
- 異文化問題について知識が増えてきた(留) / 異文化コミュニケーションについて詳しくなった(留) / 異文化コミュニケーションの方法、注意すべきこと(留) / 異文化交流のこつ(留)

■行動面

- コミュニケーションをより積極的にとることができるようになった(日) / 日本人と積極的に話せるようになった(留) / 勇気が出た(留)
- 異文化の人たちと接するときにジェスチャーとか気をつけるようになった(日) / 相手をよく観察し、気をつけてコミュニケーションするようになった(日、留) / 多言語について理解し、生活の中でも注意して応用するようになった(留)
- 留学生とのつきあい方、話すタイミングや英語を使うことに慣れた(日) / 留学生に接することへのとまどいが以前より小さくなった(日)
- 異文化コミュニケーションの難しさを痛感し、改めて相手のことを考えるようになった(日)
- 積極的に考え、人と話し、自分の力を多面的に伸ばすことができた(日)

- My competence in communication has improved / Honed in on my ability to communicate with people [コミュニケーション能力が高くなった] / コミュニケーションを円滑にとれるようになったと思う(日)

【この授業のどこ／何を变えたら、もっとよくなると思いますか。】

■進め方に関するもの

- 毎回班を組むともっと楽しい(日) / グループの活動をもっと多くする(留) / もっとクラスメートとの交流をしたかった(日) / 一度も同じグループにならなかった人がいるので、グループの組み合わせ(日)
- 皆で車座になって座ってはどうか(日) / 講義の部分で席を毎回変えれば、留学生と日本人学生の仲をもっと深めることができたと思う(日)
- 学生の日本語と英語どちらかのレベルを一定水準に合わせたほうがよいかもしいない(日)
- もっと多国籍だったら楽しい(日)

■内容に関するもの

- アクティビティーをもっと多くする(日) / もっとゲームを多くする(留) / もっと前に出て発表する機会を増やす(日) / 最後は発表より他のことをしたらよかった(留)
- もっと日本人が英語を使おうと試みるような活動にする(日)
- Meet more often [授業回数を増やす] / 2コマ続きにする(日)
- もっと多くの異文化についてのことを知りたい(留)
- 自分の経験したことを皆でディスカッションすればいい(留)

■今のままでよいという意見

- 特にない(日・留) / 今のままでいい(日・留) / I thought it was just fine the way it was [今のままでよい](留) / 学生と先生が一体となってワークショップ形式で実際にやってみるという形の授業だったので、特に変えたほうがよいと思うところはな(日)

【その他】

- 留学生の友だちができ、話す機会があってよかった(日) / 友人が増えた(日) / 色々な国の留学生と交流ができた(留) / 違う国、違う文化を持っている人と色々話せるようになったのが楽しかった(留)
- 発見がたくさんあるので楽しく受けられた(日) / 楽しかった(日・留)
- 日本人と留学生で成り立つ授業を受けるのは初めてだったのでとても新鮮だった

(日) / このような留学生と交流する授業が増えればいい(日)

- 主に1、2年の日本語教育に興味のある人のための授業だと聞いていたが、教育実習をやったからこそ吸収できることも多くあった(日)
- I will use the information I've obtained in this class for my future academic studies
[このクラスで得た情報を今後の勉学に活かすつもりだ]

3-3 考察

活動に対する評価の集計は統計処理をしたわけではないため、あくまでも目安ではあるが、総合的な評価では、日本語母語話者の間では①バーンガ、②直接法体験、③交換教授、④文化紹介、⑤非言語実験会話の順で評価が高く、非母語話者の間では①非言語実験会話、②文化紹介、③直接法体験、④バーンガ、⑤交換教授の順で高かった。つまり、両グループで順位が異なり、また、表2では数値を示さなかった年度による違いはあっても、これら5つの活動がどちらにおいても上位5位を占めていることになる。それまでに経験したことが少なく、新しい視点が得られたものが高い評価を得ていることが窺える。

非言語実験会話が非母語話者から高く評価されている理由を振り返り課題などから推測すると、自分が普段は意識すらしていなかったコミュニケーションの一面に気づくことができるほか、頭の傾きを禁じられると会話への参加度にも影響が出る多くの日本人学生を目の当たりにすることなども関係しているのではないかと推察される。日本語会話の特徴であるとされる相槌と傾きの関係についての発見が関係している可能性もあろう。留学生に文化紹介の評価が高いのは、日本人学生が日本で外国文化について学ぶよりも、現在留学中のホスト文化の未知の面について学ぶほうが、より意味のあるものにとらえられるということであろうか。実際、日本人学生の文化発表について、大変興味深いことを知ることができたというコメントをする留学生は多い。

印象に残った活動は、2012年度の留学生を除き、母語話者・非母語話者共に異文化シミュレーション「バーンガ」、直接法体験、交換教授が上位3位を占めている。例年、バーンガの回の振り返りでは「イライラした」などの感想を述べる学生が多いが、ストレスを感じる経験ではあっても非常にインパクトのある活動であることがわかる。しかし、このゲームの「言葉が通じず、自分が当然だと思っているルールを実は相手は共有しておらず思うようにならない、ルールを破る者が闖入して来て戸惑う」という疑似異文化接触状況をどこまで現実世界に置き換えて深く考察することができるかについては、毎回個人差が見られる。単に「郷に入っては郷に従え」という教訓を導き出して終わる者、あるコミュニティにおける少数者の置かれた立場に思いを巡らせる者など様々である。

「役に立った」活動はインパクトの強かった活動と重複しているが、大学生活により直接

関係がありそうなものが挙がっていると言える。交換教授は常に上位3位に入っている。

最後に「しなくてもよかった」ものとして挙げられた活動を見ると、「言語と権力」、「異文化摩擦に関するテレビ番組のビデオを視聴して話し合う」、「異文化間能力について話し合う」など、言語への依存度が高いものが目立つ。抽象的で高度な語彙と知識が必要となるためグループ活動の要素を減らして教師主導型にしたものが多いということも共通点であると言える。重い内容を限られた時間で扱おうとした結果、問題の所在および今後考えるための材料の提示にとどまり、消化不良になりがちである面も否めない。

自由記述欄は全員が記入しているわけではなく、回答を厭わない学生の声に限られるが、多くの履修者がこの科目を有意義な機会としてとらえていたことがわかる。特に、新しい知識が得られただけでなく視野が広がった、固定観念や偏見がなくなった、日本人と留学生と交流することが怖くなくなったなどの意識の変化があったと考える学生が多いことは注目に値する。また、自分が今まで無知であったことに気づいた、今まで知らなかった自分の一面を発見したなど、自分自身についての気づきも見逃せない。コミュニケーションの多面性、言語の奥深さや非言語の重要性について認識したとのコメントもいくつも見られ、さらに、そういった気づきに基づいて実際の行動につなげた、コミュニケーション能力が上がったと述べる学生も多い。

これらの他に日本人学生、留学生双方で非常に目立つのが純粋に「楽しかった」という声である。授業改善の提案欄に、お互いをよりよく知り合うためのグループ活動を増やすという趣旨のものが多いことを見ても、この授業の参加者は様々な背景の学生同士で交流する機会を強く求めていることがわかる。

上述の通り、こういった調査の常で、自由記述欄を空欄のまま提出する学生も多いが、これらのコメントと各活動への評価を併せると、この科目が掲げている目標は概ね達成されていると考えられる。

4. 今後の課題

この実践の課題の一つは、アンケート調査で「しなくてもよかった」ものとして挙げられた活動の種類が如実に示していると考えられる。それは取り上げるテーマ・活動の言語面の難易度と使用言語の関係である。履修者の言語能力に条件を設けていないため、日本語も英語も初級レベルの学生が履修することがあるが、このような場合に顕著になるのが言語の問題である。現状では教師の使用言語は日本語と英語だが、前述のような学生は、抽象度の高い語彙が多用されるテーマでは、いずれにおいても理解が困難である。配布物

は授業外で辞書を利用して理解できたとしても、リアルタイムで教師や他の学生の話を理解し、やりとりに参加することは非常に難しい。共通言語がほとんどない状況で意志の疎通を試みることも授業の目的であるため、これは科目の根幹に関わることだが、言語への依存度が高い内容の場合、十分に伝達できず内容を過度に単純化してしまう、振り返り活動も意味のあるものは困難であるという状況に陥る。言語能力を問うていない以上、評価の公平性の観点からも活動とタスクを履修者の言語的背景に応じて柔軟に変えることの重要性を痛感している。もちろん、言語能力は留学生だけの「問題」ではなく全ての履修者に言えることで、日本語母語話者や上級日本語学習者が「やさしい日本語」⁶のスキルを身につけることも重要だろう。

また、学生たちが共に目標を達成する、協働の側面をより強く打ち出した活動を増やすことも考えている。グループで「異文化間能力」の定義を考えて発表するという活動はその試みでもあるのだが、評価が高くないのは言語、特にメタ言語能力への依存度の高さに起因するのかもしれない。

最後に、授業で「自分が変わった」と考えている学生たちがその後、その意識をどのように継続、発展させていけるか、その仕組み作りも考える必要があるだろう。

5. 終わりに

本稿では、日本人と留学生が共に学ぶ授業を紹介し、そこでの学生たちの経験、学びについて論じた。授業での経験を通し「もっと異文化について知りたくなった」「もっと異なる背景の人たちと交流をしたくなった」という声が多く聞かれ、また、この授業で学んだことを授業外で既に応用している学生が何人もいるのは、このような多言語・多文化クラスが桜美林学園の長期ビジョンおよび中期目標⁷で重要な位置を占める「キャンパスの国際化」において重要な役割を果たし得ることを示唆していると言えよう。長期ビジョンでは【豊かな教養をもった国際的人材を育成する】ことを掲げ、「学生の25%程度がインターナショナル・ステューデントとなり、様々な国の学生が共に学び、交わることで、自ずと国際性が身につくキャンパス環境を整える」と述べられている。数値目標については様々な考えがあろうが、相互学習型多言語・多文化クラスが「様々な国の学生が共に学び、交わる」環境の実現に貢献し得ることは間違いない。

最後に、個人レベルでの異文化体験、異なる背景を持つ人との交流によってもたらされる意識変革が、多文化共生社会の実現につながる可能性も強調したい。昨今、在日韓国・朝鮮人を標的としたヘイトスピーチ、差別煽動が東京・新大久保や大阪・鶴橋など各地で

繰り返され、言葉の暴力や誤った情報がネットでも拡散しているが、それらの動きに同調する一見「普通」の市民を見るにつけ、差別のない社会の実現は法的制度や政治の変革だけではなく、一人一人の行動・経験によるところも大きいと痛感させられる。「多言語交流演習」の授業を通し、「未知の言葉や人や文化が怖くなくなった」、「無意識に自文化中心となっていたことに気がついた」という学生のコメントは、教育現場における地道な取り組みに希望を持たせてくれるものである。

注

- 1 2007年度春学期に新設科目として設置され、同年は松下達彦氏が担当した。2008年度に筆者が引き継ぎ、言語の交換教授を行うという点は継承しつつ新たな内容で行っている。
- 2 日本人学生などが外国語としての日本語授業に参加し、共に活動を行ったり日本語学習の支援をしたりする本学日本語プログラムの制度。2013年度春学期の登録者は200名を超えた。制度の概要は大学HPの以下のページを参照のこと。ゲスト応募の動機は杉原(2012)に詳しい。http://www.obirin.ac.jp/jf_oberlin_education/face_world/international_flavor/class_guest.html
- 3 国籍と第一言語、文化的帰属意識が一致しているとはかぎらないため、「日本語母語話者」、「日本人学生」、「留学生」、といったカテゴリーは多くの問題を孕んでいるが、便宜上、クラスを「日本語母語話者／日本人学生」と「日本語非母語話者／留学生」に分けて考えている。過去に、日本で生まれ育ったバイリンガル、バイカルチュラルの学生が二名いたが、共に前者のグループに属するものとして抽選を行った。
- 4 Sivasailam Thiagarajan によって開発された異文化疑似体験ゲームで、全体をいくつかのグループに分け、トランプのゲームを行う。勝敗を決めるルールは各グループで少しずつ異なっているが参加者はそれを知らず、一つのラウンドが終わるごとに各グループの勝者、敗者が隣りのグループに移動すると混乱が生じる。しかし、話してはいけないという決まりがあるため、言語による解決はできない。
- 5 TBS テレビで放送されていた討論バラエティ番組である「ここがヘンだよ日本人」より
- 6 日本語教師は相手の日本語力を見極め、それに応じて自分が使用する日本語のレベルを調整することに慣れているが、そうではない者にとっては必ずしも容易なことではない。1995年の阪神淡路大震災の被災者に日本語による情報が十分理解できない住民が多くいたことをきっかけに、非母語話者にわかりやすい「やさしい日本語」への取り組みが始まり、2011年3月の東日本大震災以降、さらに注目を集めている。日本各地の地方自治体やNPOで取り組みが始まっているが、弘前大学社会言語学研究室のサイトが参考になる。
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/EJ1a.htm>
- 7 以下のサイトを参照のこと。http://www.obirin.jp/gakuen/mission/mission_chuki.html

資料

多言語交流演習 (Multilingual Interaction) アンケート (questionnaire)

この授業をよくするために、授業でやったことを思い出して、質問に答えてください。もちろん、成績には関係ありません。回答(こたえ)は異文化交流を推進する(すすめる)教育研究のために使うかもしれませんが、アンケートには名前を書かないので、プライバシーは守られます。答えたくなければ、答えずともいいですが、もしよかったら、ぜひ、ご協力をお願いします。In order to improve this course, I would like to ask you to answer the following questions. Your responses will not affect your grade in the course in any way. Your answers may be used for educational research purposes to advance intercultural understanding, but you will remain anonymous since you will not provide your name on this sheet. If there are questions that you do not wish to answer, please feel free to leave them blank. I would greatly appreciate your feedback on the course.

★あなたは留学生ですか? → はい・いいえ Are you an international student? (Yes・No)★

I. 次の活動について、「ぜんぜんよくなかった=1」から「とてもよかった=5」まで、1, 2, 3, 4, 5で答えてください。Please rate each of the following activities on a five-point scale, with 1 being "Not good at all" and 5 being "Very good."

a. 「自分の文化」をグループのほかの学生に紹介する 【 】
(introducing "my culture" to group members)

[中略]

II. 上の活動の中で印象に残っている(インパクトが強かった、よくおぼえている)ものを、強い順に3つ書いてください。活動の名前ではなくてa, bなどのアルファベットで答えてください。(1 = いちばんつよい、2 = 2ばんめにつよい、3 = 3ばんめにつよい)

What are the three activities that left strongest impact / impression? Rank order the activities using letters such as a. and b. (1 = strongest, 2 = second strongest, 3 = third strongest)

1. () → 2. () → 3. ()

III. 上の活動の中で役に立ったものを順番に3つあげてください。What were the three most useful activities? Please rank order the useful activities.

1. () → 2. () → 3. ()

IV. 上の活動の中でしなくてもよかった(役に立たなかった)ものを3つ選んで、必要のない順にa, bなどで書いてください。(1 = いちばんよくない) What are the three least important activities? Please rank order them so that #1 is the least useful and could have been left out.

1. () → 2. () → 3. ()

[中略]

スペースがたりなかったら、うらに書いてください。Please feel free to provide your comments on the back of this paper if you need more space. ありがとうございます!

参考文献

- 足立祐子・押谷祐子・土屋千尋 (2001)「コミュニケーション体験の場としての多文化クラス」『第12回日本語教育連絡会議報告発表論文集』 pp. 42-47
- 池田智子 (2012)「大学の多言語・多文化クラスにおける留学生・日本人学生の経験」『2012年 日本語教育国際研究大会予稿集』
- 岩井朝乃 (2006)「日本人大学生の「文化的他者」認識の変容過程—多文化クラスでの異文化接触体験から—」『異文化間教育』 23号、pp. 109-124
- 杉原由美 (2012)「日本語プログラムが創る多言語多文化共生学習の可能性—留学生日本語授業「クラスゲスト」の応募動機に注目して」『OBIRIN TODAY』 第12号、pp. 111-126